

「しんどくても 1 人じゃない」という想いが届けば、

きっと生きる希望が出てくる

瀧本 裕喜

KHJ ジャーナル『たびだち』は、ひきこもり家族会が年に 4 回発行。ひきこもりの当事者・家族の声から、専門家のインタビュー、都道府県、各自治体の働きなど、ひきこもりに関することを幅広く発信している。

昨今のマスコミは、何か事件があったとき、事実確認を取らないで、犯罪とひきこもりを結びつける傾向がある。特に川崎殺傷事件、練馬元事務次官の事件は、ひきこもりを犯罪者予備軍のように扱い、ひきこもりの当事者・家族は心を痛めた。

ひきこもりの当事者・家族の気持ちを一般の人に理解してもらうために、2019 年に『たびだち』を全面的にリニューアル。KHJ の全国組織ならではの経験や知見、ひきこもりに関するノウハウなどを発信している。

ひきこもり当事者・生の声は、生きるヒントになる。生きづらさを抱えている人に「しんどくても 1 人じゃない」という想いが届けば、少しでも生きやすくなるのではないか。表紙の写真からデザイン、記事の執筆・編集、台割りに至るまで、ひきこもり当事者・経験者が制作に携わっている。

編集会議は、リアルな会場と全国各地からの参加者のオンラインでの参加。家族を含めて、20～30 人ほど参加している。Zoom は顔を出さなくても、参加できる。オープンにしたくない人は、匿名性を守れる。また話すことに苦手意識がある人は、チャットで自分の意見を発表している。外出できなくても、オンライン環境が整えば、自宅からの参加可能だ。特集テーマを考えて、「こんな企画があったらいいな」と、お互いにアイデアを出し合っている。

今回の分科会では、どのように『たびだち』を作っているのか。「どうしてたびだちで書こうと思ったのか?」「記事を書いてみて、感じたこと」などを制作に関わっている人にインタビュー。ひきこもりのオープンスペース『ねころんだ』の中継。参加者のみなさんとのアイデア出しを予定している。

新潟県十日町市のオープンスペース『ねころんだ』は、来年で 7 周年を迎える。規則や会話のしぼりはなく、挨拶をしなくてもいい居場所だ。ひきこもり経験者だけではなく、赤ちゃんからおばあちゃんまで、世代を問わずに参加できる。

当事者たちの創作活動が活発になり、2019 年に出版した当事者たちの手記『あしあと ～ひきこもり発 地域社会行き～』は、第 11 回新潟出版文化賞文芸部門を受賞する。現在は長岡市の印刷会社も加わり、ひきこもり生活に焦点を当てた小冊子『ねころんだ Life』を発刊している。

「当事者が自分の言葉で語るのが一番誤解を生まない。本人の声が一番届く。たびだちに投稿したい」と、『ねころんだ』の運営者のみちえさんは述べる。文章を書くのが苦手な人でも、口述筆記ならば、「これなら書ける」と本人は言ってくれる。自分の体験が記事になれば、自信もつくし、自分を見つめ直すきっかけになるそうだ。

分科会のオープン会議を通じて、いろんな人がつながる場になってくれたらいい。「こんなことを形にしたい」「あんなことを伝えたい」、みなさんの想いを共有しながら、アイデアを出していけたら良いと思う。